

り、川崎病に類似した症例で、高値を示した興味ある1例を経験した。

18. 大腸癌における末梢血および所属リンパ節のリンパ球動態の研究

(第二病院外科)

川田 裕一・松本 紀夫・小川 健治・
梶原 哲郎・榊原 宣

大腸癌切除症例23例を対象に、そのリンパ球動態について所属リンパ節を中心に検討した。

OK シリーズよりみた所属リンパ節のリンパ球サブセットは非所属リンパ節と異ならなかったが、末梢血とは異なっていた。PHA リンパ球幼若化反応、NK 細胞活性よりみた所属リンパ節のリンパ球機能は非所属リンパ節、末梢血にくらべ、低値であった。Dukes A・BとCをくらべると、所属リンパ節のリンパ球サブセットは異なる傾向を示した。これに対し、非所属リンパ節、末梢血のリンパ球サブセットに有意の差はなかった。リンパ球機能についてみると、所属リンパ節、非所属リンパ節、および末梢血いずれにおいてもDukes A・BとCのあいだに有意の差はなかった。

大腸癌において、リンパ球動態はなんらかの影響を受けていると考えられる。とくに、それは所属リンパ節において著しいと推定される。

19. 実験的免疫学的ぶどう膜炎におけるLTB₄について

(第二病院眼科) 小椋 祐子・金 恵媛・
渡辺千恵美・宮永 嘉隆

アラキドン酸の5-lipoxygenase系代謝物であるLeukotriene (LT) B₄は、強力な白血球遊走活性を示すことから種々の炎症に重要な役割を担っている事が示唆されている。そこで今回私達は、ウサギに種々のぶどう膜炎を惹起させ、LTB₄の関与について検討した。方法：1) 卵白アルブミンを硝子体内注入によるぶどう膜炎、2) 牛血清アルブミンによるArthus型ぶどう膜炎、3) 虹彩、脈絡膜、網膜組織抽出液による自己免疫性ぶどう膜炎を作製し、それぞれのぶどう膜炎惹起眼より採取された前房水および硝子体液のLTB₄を河野らの方法で抽出し、RIA法で測定した。その結果、各種ぶどう膜炎惹起眼の前房水中には1,000pg/ml前後のLTB₄の遊離が認められ、特にArthus型ぶどう膜炎では最も高値を示した。また硝子体中ではArthus型ぶどう膜炎で663pg/mlと高い値を示した他は、特に差は認められなかった。従って、ウサギ眼炎症にLTB₄が何らかの役割を演じている事が示唆された。

20. TDIに特異的なIgG抗体に関する実験的研究

(第2衛生) 長尾 憲樹・石津 澄子

ポリウレタン樹脂の原料であるToluene diisocyanate (TDI)を用いて、皮膚感作させたマウスの血清蛋白質を、二次元電気泳動法、Enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA)、およびImmunoblotting法で検索し、下記の事実を明らかにした。

1. ELISAを用いてTDI-specific IgG抗体の検出を行ったところ、TDI塗布群と対照群との間に明らかな差異がみられた。

2. ELISAにおけるTDI-specific IgG抗体のレベルと耳介腫脹率の間には、有意な相関がみられた。

3. TDI-specific IgG抗体は、Immunoblotting法により分析してみると、TDI塗布群の全例にTDI-BSA monomerに結合がみられた。そのうち3例は、TDI-BSA dimerあるいは、trimerにも結合がみられた。

21. 造血器腫瘍に対するlymphokine-activated killer細胞活性

(第1内科) 押味 和夫・阿久津美百生・
武井 弥生・溝口 秀昭

Lymphokine-activated killer (LAK)細胞は、interleukin 2により活性化されたキラー細胞でNK抵抗性の腫瘍をも障害する。造血器腫瘍に対するLAK活性に関する報告はほとんど見当たらないため、本研究を施行した。方法は組み換え型IL-2 2,500u/mlで5日～4週間培養した末血単核細胞をエフェクターとし、5時間の⁵¹Cr放出試験で自己腫瘍細胞に対するキラー活性を測定した。結果としては、5日培養のLAKは18例中14例で自己腫瘍を障害し(AML 9例中6例、ALL 3例中2例、悪性リンパ腫6例全例)、2週間培養後のLAKは14例中13例、4週後のLAKは13例中9例で障害作用を認めた。考案。現在数週間に亘って増殖させたLAK細胞の性状について検討中であるが、in vitroで活性化・増殖した細胞を治療として用いる可能性を考慮中である。

22. 自己癌細胞に対するヒトキラーT細胞の誘導とそのクローン化の試み

(消化器内科)

長谷川 潔・山内 克己・古川 隆二・
邱 世賢・中西 敏己・小幡 裕

目的：患者リンパ球を用いて自己癌細胞特異的キラーT細胞(CTL)の誘導と、そのクローン化を試みた。方法：癌性腹膜炎患者の腹水を75%、100% Ficollに重層し、それぞれ癌細胞、リンパ球のenriched frac-

tionを得た。リンパ球よりEロゼット法でT細胞を分離し、MMC処理腹水細胞(癌細胞を含む)と培養することによりCTLを誘導した。こうして得られたCTLを限界希釈法によりクローン化を行なった。CTL活性の測定には⁵¹Cr release assayを用いた。結論：癌細胞を含むMMC処理腹水細胞との培養により、T細胞の自己癌細胞に対するキラー活性は増強する。クローン化された自己癌細胞特異的CTLは、その細胞表面のT₃、T₈抗原をそのレセプターの一部として用いていることが示唆された。

23. Toxic shock syndrome toxin-1 (TSST-1) によるマクロファージ活性因子産生誘導の解析 (微生物)

鎌形 有祐・内山 竹彦・吉岡 守正

Staphylococcus aureusより産生される外毒素であるtoxic shock syndrome toxin-1 (TSST-1)はtoxic shock syndrome (TSS)を発症すると考えられている。

我々は、TSST-1によりマウスリンパ球からマクロファージ活性化因子(MAF)の産生が誘導されることを認めたので報告する。方法、①TSST-1刺激培養上清：C57BL/6マウス脾臓細胞 1×10^7 個にTSST-1 10 ng/mlを添加し、48時間培養後の上清を用いた。②MAF活性の測定：C57BL/6マウス腹腔マクロファージ(M ϕ)をTSST-1刺激培養上清及びLPSにより刺激後、EL-4細胞を添加し、EL-4細胞の増殖抑制率により、TSST-1刺激培養上清中のMAF活性を測定した。結果①IL-1産生能の増加：TSST-1 20 μ g腹腔投与マウス脾臓細胞M ϕ にLPSを添加し、IL-1の産生を調べると無処置マウス脾臓M ϕ の場合と比較してIL-1産生の増加が認められた。②TSST-1刺激培養上清で刺激したM ϕ はEL-4細胞の増殖を著しく抑制した。以上のことはTSST-1がMAFを介してM ϕ 機能を亢進させる可能性を示唆していると思われる。

経中心静脈高カロリー

健保
適用

高カロリー輸液を中心とした栄養管理を安全に実施できるよう、製剤上の問題点を解決しました。

●適応症

経口、経腸管栄養補給が不能または不十分で経中心静脈栄養に頼らざるを得ない場合の水分、電解質、カロリー補給に用います。

●成分中のCaとPの反応を避けるため(加熱滅菌時)A液、B液に分け、交互に投与するようにしてあります

●用法・用量、使用上の注意は添付文書をご参照ください。

パレメンタルA パレメンタルB

- 日本人の1日栄養所要量を基準にブドウ糖、電解質を配合してあります
- 本剤を用いて高カロリー輸液を調製する場合、混合の回数が少なく調製時間の短縮、労力の減少、細菌汚染及び微粒子混入の機会の減少をはかることができます

●包装：パレメンタルA 400ml×10V
パレメンタルB 400ml×10V



製造発売元

森下製薬株式会社

大阪市東区道修町4丁目29番地

輸
液
用
基
本
液